



Title	キリシタン版『さるばとるむんぢ』ユトレヒト大学本の発見：思想史およびキリシタン語学からの検討
Author(s)	岸本，恵実；白井，純；折井，善果
Citation	大阪大学大学院人文学研究科紀要．2024，1，p. 183-217
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/94804">https://doi.org/10.18910/94804</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# キリシタン版『さるばとるむんぢ』 ユトレヒト大学本の発見 ——思想史およびキリシタン語学からの検討——

岸本 恵実      白井 純      折井 善果

キーワード：『さるばとるむんぢ』(Salvator Mundi)、キリシタン版、告解（ゆるしの秘跡）



図版 1：ユトレヒト大学本『さるばとるむんぢ』扉（2023 年 9 月著者による撮影 図版 2、3 も同じ）

## 本稿の構成

### 第 1 章 はじめに

### 第 2 章 日本宣教史料にみる告解と先行研究

### 第 3 章 『さるばとるむんぢ』成立の思想的背景（折井）

ラテラノ、トリエント両会議における“告白 (Confessio)”の取り扱い

“告解の手引書”とは何か

イエズス会日本宣教における『さるばとるむんぢ』の位置

### 第 4 章 『さるばとるむんぢ』の基本書誌

### 第 5 章 キリシタン語学の視点からみたユトレヒト本

## 活字と印刷（白井）

### 字集・用語集

## 第6章 まとめ：研究の今後の見通し

（記名のない章・節はすべて岸本による）

### 1. はじめに

従来ローマのカサナテンセ図書館1本（1598年刊）のみが知られていた、『さるばとるむんち』の異植字版の1本（1595年？刊）が、ユトレヒト大学図書館において発見された。第一報は、2022年2月10日、図書館のウェブサイトを通じてスウェン・オースタカンブ（Sven Osterkamp）氏により行われ、同時にユトレヒト本の画像も公開された<sup>1)</sup>。以下、本書を『さるば』、カサナテンセ本をC本、ユトレヒト本をU本と表記することがある。

この発見は、C本1本であった故に追究できない点が多かった『さるば』研究にとり僥倖であったばかりでなく、近年、研究領域、地域・時代の面から多角的に行われているキリシタン版研究にも光をもたらした。U本の来歴および特徴はすでにOsterkamp（2022）（2024）に明らかにされているところが多いので、本論文はできるだけ重複を避け、まずヨーロッパ思想史の面から『さるば』の成立背景を詳述し、続いてキリシタン語学<sup>2)</sup>、とくに印刷史と辞書編集の立場から『さるば』の独自性を明らかにすることで、U本発見の意義を具体的に示すことを目指した。

『さるばとるむんち』は従来、キリシタンの告解<sup>3)</sup>の手引書と称されてきた。日本語で書かれ国字で印刷されていることから、主な対象者は日本人信徒と考えられる。告解については師弟の問答形式で書かれた基本教理書『どちらいなきりしたん』（1591年？刊）に以下のように「第九 御母さんたゑけれじや（聖なる教会）の御おきての事」（48～49丁）と「第十一 さんたゑけれじやの七のさからめんと（秘跡）の事」において詳しく説明されている<sup>4)</sup>。

1) この経緯は宮川（2022）に詳しい。また日本語学会2022年度春季大会（2022年5月14・15日オンライン開催）において、オースタカンブ氏による講演「A hitherto unknown Jesuit confessionary in Japanese language and script (ca. 1595)」が行われた。ユトレヒト本の画像は<https://utrechtuniversity.on.worldcat.org/oclc/1285498612>より見ることができる。また、カサナテンセ本の画像は<http://books.google.com/books?vid=IBCR:BC000019474>にて公開されている。（いずれも2023年10月19日アクセス）

2) 「キリシタン語学」は、16世紀から17世紀、カトリックの日本宣教のために作成された各種文献を言語資料として研究する分野である。岸本・白井編（2022:i）参照。

3) 第二バチカン公会議後の1978年、日本では「ゆるしの秘跡」という名称が使用されている。本稿では、近代以降伝統的に使われてきた「告解」の用語を用いる。「告解の手引書」の歴史については、第3章にてあらためて検討する。

4) バチカン図書館本（勉誠社1979複製）による。「第九」「第十一」は、それぞれ「第八」「第十」の誤り。引用では、原文に無い符号、下線、（ ）内に原語の現代語訳を適宜補った。

## 第九 御母さんたゑけれじやの御おきての事

(中略)

師 第一 どみんご（日曜日）・べあと日（祝日）にみいさをおがみ奉るべし

第二 せめて年中に一度こんひさん（告白）を申べし

第三 はすくは（復活祭）にえうかりすちあ（聖体）のさからめんとをさづかり奉るべし

第四 さんたゑけれじやよりさづけ給ふ時ぜじゆん（断食）を致し せずた<sup>5)</sup>さばど（聖土曜日）に、くじきすべからず

第五 +ぢずもす・ひりみしあす（教会税）をさ、くべし

このあと、信徒は聴罪司祭がいれば少なくとも一年に一度、復活祭前の四旬節に告解を行うことと、告解を行うための心得が説かれている。さらに、「さんたゑけれじやの七のさからめんとの事」では、「へにてんしや<sup>6)</sup>のさからめんと（告解の秘跡）」が、「こんちりさん（痛悔、悔い改め）」「こんひさん（告白）」「さしちはさん（償い）」の三要素からなることが説明されている（67丁）。

弟 第四ヶ条目のさからめんとは何事ぞ

師 へにてんしやのさからめんと也 是即ばうちずも（洗礼）をさづかりて以後あにま（靈魂）のやまひとなる科をなをさるゝすひりつある（精神）のらうやく也

弟 へにてんしやはいくつにきはまるや

師 三にきはまる也 一にはこんちりさんとて心中のこうくはい也 二にはこんひさんとてことばにてさんげする事也 三にはさしちはさんとて所作をもて科をくりをすること也

『さるば』は告解の秘跡のうちでも「こんひさん」の際、自分の犯した罪を悔い悲しみ、告白するための、『どちらいな』よりさらに具体的な手引きである。末尾の附録を除く本文の構成は、C本・U本で異ならず、以下の通りである。引用はU本による。はじめの第一～第三では、告白の意義とそれを受ける心構え、第四・第五では十戒、第六では七つの大罪にもとづく良心の糾明、第七では再び罪を犯さないための祈りなど信仰生活のあり方を説いている。

5) 原本は「せずた」に誤る。

6) 「ぺにてんしや（penitencia）」が正しい。

こんひさんをよく申やうと又善作に日を、くるべき儀ををしゆる事

第一 こんひさんの徳儀の事

第二 こんひさんを申べき人々たもつべき条々

第三 こんしゑんしやをた、す道ををしゆる事

まだめんとの事

第四 まだめんとの初の三ヶ条に付てた、すべき事

第五 あひのこる七ヶ条のまだめんとの事

第六 七のもるたる科に付てこんしゑんしやをた、すべき条々

第七 善作に日をおくるべき為たもつべき条々

## 2. 日本宣教史料にみる告解と先行研究

次に、日本宣教における関連史料と研究史を概観する。

信徒の告解のことは、宣教師の記録において頻繁に言及されている。これらはロペス・ガイ（1983）に詳しく、さらに大島（2009）は、邦訳されたイエズス会宣教師の書簡、報告、年報から告解に関連する記述を収集し、特徴を分析している。さらに、南蛮屏風にも告解の様子が描かれているものがあり<sup>7)</sup>、日本において定着していた様子がうかがえる。ここではキリシタン版に関する記述に焦点を絞った尾原（1983）、高瀬（2017）とあわせて検討し、告解の手引書に関する記述を抜粋して年代順に示す。

尾原（1983）によると、ルイス・フロイスの1566年4月30日付書簡に「(キリシタンは)日本語に翻訳された告白の書と、御聖体を受ける準備の書とを所持していた」、またフロイスの1573年4月20日付書簡に「(一人のキリシタンは)私に対して謙遜な態度をもって告白したい旨を伝え、告白の準備がよりよく為されるためにも日本の言葉と文字でもって書かれた書を手に入れたいと述べた。彼は私達が翻訳した告白の書をここから持って行き(後略)」と、告解手引書の草稿がすでに存在したことを指摘している。またヴァリニャーノは来日前すでに、インド巡察後の会議（1575年12月）にて、カテキスモ、告白の手引と教理を合わせたもの、そして聖人伝をその土地の言語で作製することが必要と述べていたという。

さらに、フロイスが1595年10月20日付で記した、1594年3月から1595年10月の年報（高瀬（2017:412-413, 501））によると、日本語と日本の文字で、告白をし、ロザリオに祈り、その他キリシタンたちに適した信心の務めを行う仕方についての、その他の諸々の小冊子が印刷されたという。1596年12月3日付の1596年度の年報にも、大坂城に居た京極マリアの依頼に応じ、都の修道院長が他の書とともに告解の手引き（un confessorario）を送った

7) 南蛮文化館蔵、伝狩野派『南蛮人渡来図屏風』が知られる。

ことが記されている（五野井（2017:52））。これらは従来、現存する書との対応が明らかでなかったが、今回発見されたU本と同版の『さるば』であった可能性がある。

1599年2月28日付ディオゴ・デ・メスキータの書簡（González-Bolado（2023））に、1500部以上の告解書（mas de 1500 co[n]fessionarios）が印刷されたとあり、これはC本と同版かと思われる。また同年10月28日付メスキータの書簡にも、日本の文字で記してある告解（confession）の冊子のことが記されているが、これも同版であろうか（高瀬（2017:403））。

さらに高瀬（2017:500）によると、1600年10月25日付の1600年度年報にも、告解についての小冊子（un libretto de la confission）が豊後の高田にあったことが書かれている。1603年1月6日付のメスキータによる証言文書にも、告解の手引き（Confessionario）がその他の種々の書とともに日本の文字で印刷されていたことが記されている。これら1600年以降の記録にある告解書は、C本と同版かもしれないが、1598年以降の版があった可能性もある。

このほか、現在所在不明になっているが、伊達支藩亙理藩士田村家に伝わっていた「切支丹抄」と称せられる写本は、『さるば』と同文である「十かでうの御おきての事」に始まる、十戒の第二戒途中までの内容の文章を含んでいる。翻刻は海老沢（1952）に、一部の写真は西村（1937:202-203）に収められている。この資料も、『さるば』（厳密に言えば『さるば』と同じ文言）が信徒に普及していたことを伝えるものである。

その後幕末、C本は1868年に、パリ外国宣教会のプチジャンにより日本再宣教の資料とするためキリシタン版を探し求めた際見出され、『校正再刻とがのぞき規則』（1869年刊）として刊行された。しかし、プチジャンはC本を典拠にしたことを公にしたわけではなかったため、この書のことが広く知られるようになったのはSatow（1888）の報告によってである。その後、U本の発見まで、おおむね以下のような研究があった。『さるば』に限ると、複製には海老沢有道編（1978）があり、その前から翻刻索引として松岡（1973）が知られていたが、その後漆崎（2017）が松岡の翻刻を修正している。そのほか部分的翻刻にコリヤード著・大塚光信校注（1986）、尾原（2005）がある。

『さるば』は、分量が少なく孤本であったためかそれを中心とする研究は少なく、以下①～④のように他の資料とあわせて取り上げられてきた。

①コリヤード『さんげろく』（1632年刊）との比較。ドミニコ会士ディエゴ・コリヤードが、告白の教えと事例を日本語・ラテン語の対訳で著した『さんげろく』は、先行する『さるば』と構成と内容に類似点がある。コリヤード原著・大塚光信著（1985）、日埜博司編著（2016）などで比較されている。

②プチジャン版『校正再刻とがのぞき規則』など明治以降の書との比較。海老沢（1943）、

中村（2000）、高祖（2012）など。

◎キリシタンの秘跡・典礼の研究。

①印刷史からの研究。（本稿 5.1. にて述べる）

◎キリシタンの秘跡・典礼の研究では、『どちりいなきりしたん』のほか『ばうちずもの授けやう』（1592 年？刊）、『ナバルスの告解提要』（1597 年刊）、『金言集』（1603 年刊）、『サカラメンタ提要』（1605 年刊）と内容上関連が深い。『ばうちずも』は国字本であり、死が近い人にばうちずも（洗礼）と告解の秘跡を授けるための手引き、『ナバルス』『金言集』はラテン語で記された聴罪司祭向けの告解手引き、『サカラメンタ提要』は秘跡を執り行うためのラテン語の典礼書であり、各書についての研究はあるものの、『さるば』との関係が取り上げられたことは少なかった。本稿では次の第 3 章にて、『ナバルス』との相違を取り上げる。

もう一点『さるば』との関係が注目されるのは、おそらく 1603 年長崎にて出版され、禁教時代伝承された『こんちりさんのりやく』である。現在まで刊本は見つかっておらず複数の写本のみ伝わっているが、川村（2011）、浅見（2022）が主に思想史の面から論じている。日本では常に聴罪司祭が不足しており、告解を望む信徒の求めに応えられていなかったことは、宣教師の書簡などに繰り返し記されている（五野井（2017:87-89））。『こんちりさんのりやく』は司祭不在でも有効な「こんちりさん」の手引書として、『さるば』に取って代わる形で長く伝えられたようである。また、プチジャンは長崎で信徒から入手した『こんちりさんのりやく』写本に基づき『胡無知理佐无之略』（1869 年刊）を刊行している。

このように後年の資料と比較されることが多かった『さるば』であるが、次章では成立前史にさかのぼって述べる。

### 3. 『さるばとるむんぢ』成立の思想的背景

扉表の上・下段の表記をとって『さるばとるむんぢ』（*Salvator Mundi*）の名で知られるキリシタン版小冊子の内容については、「告白手引書」、「告解の手引書」といった一言で片付けられてしまうことが多かった。しかし、それが当時の日本にいた誰のために、またどのような読まれ方をされるべき著作として印刷されたのか、またその思想的な背景については、いまだ考察の余地があると思われる。

本書が「翻訳書」すなわち同時代のヨーロッパですでに出版されていたいずれかの書籍を日本語に訳したものであるのか<sup>8)</sup>、あるいはいずれかの在日イエズス会宣教師ないし同宿が

8) 東馬場（2018:62）は、本書が「翻訳」であると述べ、原書にはない日本の信徒実情に応じて独自に付加された告解の際の確認事項がある、としているが、その原書が何であったかについての言及はない。



構想し、書き上げたものであるのかについては、筆者折井の浅学のため、未だ不明である。一方で、16世紀から17世紀にかけてのヨーロッパ、とりわけトリエント公会議以降のカトリック世界においては、“告解の手引き”の名に値する、おびただしい数の書籍が存在する<sup>9)</sup>。『さるば』は日本という遠隔の地で印刷されたとはいえ、それらの書籍群の紛れもない一つであり、内容的に多くの共通性を有している。したがって、以下では、同様の思想的・教義的動向の中から生まれた、ヨーロッパの告解手引書の成立と流布の背景を紐解きながら、日本イエズス会の宣教政策における『さるばとるむんち』の思想的な位置づけを試みたい。

### 3.1. ラテラノ、トリエント両会議における“告白(Confessio)”の取り扱い

『さるば』はC本扉紙裏にある通り *Confessionarium* すなわち告解の秘跡 (*Sacramentum paenitentiae*) に必要な行為要件である告白 (Confessio) を行うための、聴聞司祭 (Confessor) ならびに告解者 (Paenitens) のためのマニュアルである。

教会史における告解の発展における重要な出来事の一つは、1215年、第4回ラテラノ公会議において、四旬節の期間中に小教区の司祭の前で告解することが、聖体拝領とともに、すべての信徒に毎年義務づけられるようになったことである<sup>10)</sup>。同会議の決定により、教会は教会共同体における個人の行動や社会的行為を管理・統制する強力な手段を手にしたことになる。具体的には、分別の年齢に達した男女のキリスト教徒に、個人的かつ詳細な方法で、少なくとも年に一度、教区司祭にすべての罪を告白する義務を課している。この規定が、その後の何世紀にもわたって、社会的規律や多くの人々の個人的管理という点で、教会側ならびに信徒側にもたらした影響は大きい。この問題に関する近年の研究であるアルクリは、告解の歴史についての古典的な研究であるレアの、これは「おそらく教会史上最も重要な立法行為」<sup>11)</sup>であるという言葉を想起している。

トリエント公会議は、1551年11月25日の第14セッションにおいて、告解の問題を取り上げ<sup>12)</sup>、ラテラノ公会議の決定を繰り返しつつ、教会における七“秘跡”のうちの一つとしての地位を強調した。これによって告解は、カトリック教会組織においてより一層重要な役割を担うようになるとともに、宗教改革者たちによる「義認・義化 Justificatio」の解釈をめぐる挑戦に対するカトリックの返答を象徴する行為となった。さらに、新旧両教の対立の核

9) González Polvillo (2010) は、スペインおよび本国以外でスペイン人によって執筆された書籍目録に5103タイトルを数える。CD-ROMで付録として付されているこの目録は GoogleBooks デジタル版では巻末に付されている。

10) デンツィンガー (1974:189-190)。

11) Lea (1896:230), Arcuri (2017:180)。

12) トリエント公会議第6セッション「義化について」(1547年1月13日)では、告解の秘跡をもって、失った恩寵を回復すれば、再び義とされる、と明言されている。デンツィンガー (1974:279-280)。



心としての「義認・義化」の問題は、罪と救い、すなわち人間の霊的な死か、永遠の救済か、という卑近な日常の問題に照らして読み解かれていった<sup>13)</sup>。

告解は、カトリック世界の地球的拡大を目指す同時代の宣教師にとって、指導下の信徒の考えや生活様式・態度を直接知る機会であるとともに、彼らを宗教的に指導し、カトリック共同体の生活に彼らを社会的に一致させるための主要な手段であった。つまり、告解という秘跡の実践を通じて、個人の良心＝こころの内側により深い影響を与えることが可能になるとともに、教会ないし教会共同体への忠誠心形成のためにも重要な役割を果たしたことは想像に難くない。

### 3.2. “告解の手引書” とは何か

告解者と悔悛者のマニュアルは、トリエント公会議の発明というわけではないが、これらの作品が独立した書物のジャンルとして確立した背景には、前述の第4回ラテラノ公会議の影響が見て取れる。告解が全信者の義務的な行為となされたことは、それだけの行為を執りしきることのできる数の聖職者が必要となることを意味する。13世紀に普及が始まった告解のマニュアルは、告解という秘跡のあらゆる段階（前述の後悔・告白・償い）において、各々の教区を取り仕切る司祭を教導する、という目的のために普及した。

16世紀から17世紀にかけて、キリスト教国においては、「罪の意識」が教養のない人々の間でも熱狂的なレベルに達したといわれる<sup>14)</sup>。その背後で、罪人である人間と神との和解という超自然的役割を担わされた秘跡として、トリエント公会議以降、告解は教義に則した規範や実践を個々人そして社会に導入するための主要な武器となった。教区司祭は、魂の救いと、社会的規律の両側面において役割を果たすよう求められた。

したがって、トリエント公会議以後の司祭は、ローマ・カトリックの規律を内から外から教区内の信徒に要請するための十分な知識を有し、信者のいかなる告白にも適切な答えを備えた人物でなければならなかった。ここに至って、カトリック教国において、告解に関する道徳的な出版物が大量に作られたのは必然である。例えば先述のアルクリは、スペインに関する限り、告解に関する提要（マヌアル）は近世におよそ2000版を重ね、そのうち70%以上が16世紀から17世紀、特に1550年から1640年の間に出版されているという<sup>15)</sup>。このような提要は、当時の書籍商や宮廷人らの目録にも多く見出されることから、司祭のみならず、「悔悛者」にも一定程度用いられたようである<sup>16)</sup>。

13) プロスペリ（2017:136）。

14) ドリュモー（2004:585）。

15) Arcuri（2018:188）。論者はGonzález Polvillo（2010）をもとに分析を行っている。

16) Morgado García（1997:121）、Arcuri（2018:197）。

『さるば』は、悔悛者の視点、すなわち司祭がいかに告解の秘跡に信徒を教導し、どのような心得を“させるべき”かではなく、主に、信徒側が「こんひさん」を為すにあたってどのような心得を“すべき”か、という視点が重視されている。そしてそのような視点から、「十戒」や「七悪」に因んだ反省すべき具体的内容を列挙している。

「まだめんと」すなわち十戒について述べた箇所では、キリシタンに課せられる多種多様な義務、すなわち神、教会、世俗の権力に対する義務、さらにはキリスト教共同体における家族、社会、経済における道徳的自己規制を目的とした一連の反芻事項が列挙されている。宗教改革と市民革命の始まりに挟まれたヨーロッパ近世は、ときに「宗派化 Confessionalization」の時代と言われ、「自宗派の教義・世界観・人間観に従って信徒大衆の日常生活に深く介入し、個人的差異や地域的偏差を平均化し、中央政権に服する同質的な臣民社会の形成を推し進めた」時代であるといわれる<sup>17)</sup>。このことは、心の中というもっとも小さな単位が、共同体というより大きな単位に包摂されていくプロセスという意味において、日本のキリシタン時代にもあてはまるであろう。教会の教えに照らして自分の考えや行いの何が正しく、何が罪に当たるのかを、告解という共通のシステムを通じて精査することにより、キリシタン共同体の形成が推し進められるという、“公”と“私”を密接に連関させるシステムとも言い換えることが可能である。その意味でいう「宗派化」の試みが、具体的にいかなる教条を通じて行われていたのかを、小冊子であるがゆえに、いっそう簡潔に示すのが『さるばとるむんぢ』であろう。

先述のロペス・ガイは、来日したカトリック宣教師たちが書き残した、日本人信徒の告解の実態についての諸報告をまとめ、告解の秘跡が「キリシタン時代に放った異彩は驚嘆すべきものであった」と述べる<sup>18)</sup>。先述の大島も、多くの記述が散見されることを明らかにしている。その理由としては、同氏のいうように、日本の宗教的伝統、特に罪と浄めの思想を中心とした神道の影響や、当時の戦争や迫害が信者を告解へ向かわせたことなどが挙げられようが、先述のようなトリエント公会議の影響により、宣教師自身が告解の意義を強調すべき立場にあったこともその理由の一つであろう。

### 3.3. イエズス会日本宣教における『さるばとるむんぢ』の位置

『さるば』が出版された意図は、皮肉にも、イエズス会巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノが、遅れて日本宣教を開始したフランシスコ会のマルティン・デ・ラ・アセンシオンから受けた批判に対して行った一連の『弁駁 *Apología*』の中で明らかにされている。フランシスコ会側は、イエズス会が日本の異教徒の改宗のために行う方法は正しくなく、教えるべき

17) 踊（2011）。

18) ロペス・ガイ（1983:99-101）。

教条に関して無知なままに放置している、と批判する。それに対して、ヴァリニャーノは、日本布教はいまだ新しい段階にあるため、すべてを一度に教えるのは有害であり、教えるべき時と段階があるのだと弁駁している。続いて以下のように述べる：

イエズス会のパードレがいかに明白に信者たちを教導しているかを知るために、彼（アセンシオン）はコンフェシオナリオを読むこともできましょう。それは我々の手によって日本語日本文字で印刷されており、そこには大変綿密かつ明解に十戒と諸々の罪についてその他のことと共に述べられており、それはスペインでなされ得るのと同様です。（y para que se vea cuán distintamente van enseñando los Padres a los cristianos pudiera él leer el Confesionario impreso por los nuestros en lengua y caracteres de Japón, en el cual tan menuda y claramente se declaran los Mandamientos y pecados con todo lo demás, como se pudiera hacer en España.）<sup>19)</sup>

ヴァリニャーノの大部にわたるこの「弁駁」は、『さるば』C本の刊行と同じ1598年に脱稿された。前年の1597年には、当時のカトリック教会を代表する教会法学者・倫理神学者で、後半生はローマで活躍したマルティン・デ・アスピルクエタ（1493-1586）が著し、没後イタリア人イエズス会士ピエトロ・アラゴナ（1549-1624）によって編纂されたラテン語著作『ナバルスの告解提要 *Compendium Manualis Nauarri*』<sup>20)</sup>が、日本のイエズス会印刷所で出版されている。このいわゆる“キリシタン版”は、アントワープでペトルス・ベレールス（Petrus Bellerus（ないし Bellère））の印刷所から1592年に出版された同著作の内容を、ラテン語でそのまま再版したもので、いくつかの邦訳キリシタン版にあるような、翻訳時の内容の改編などは管見の限り見られない<sup>21)</sup>。当時のヨーロッパにおけるルター、ペラギウス派といった“異端”が名指しで批判されている部分もそのまま日本で印刷されていることから、この『提要』の読者として、（わずかの例外を除いては）日本人は想定されなかったと思われる。加えて、この『提要』が使われた、読まれた、といった、当時の日本での宣教師記録が未だ見つかっていないことから、読者は非常に限定的であったことが推測される。

これに比して、『さるばとるむんち』の使用についての記録は、上記の通りヴァリニャーノが書き残しており、第1章で言及されたルイス・フロイスやディオゴ・デ・メスキータの報告も存在する。そしてヴァリニャーノの上記の主張が、日本という新しい地への“適応

19) Valignano Alessandro and Álvarez-Taladriz José Luis (1998:255).

20) Alagona, Pietro (1592) *Compendium Manualis Nauarri*, Antwerp: Pierre Bellère. ナバルスとはアスピルクエタの故郷スペインのナバーラに因み、アスピルクエタは「ナバーロ博士 Doctor Navarro」と呼ばれた。

21) 原典の分析については Orii (2024, forthcoming) を参照。

（acomodar, acomodación）”のためにはある種の“隠匿（disímulo）”も肯定され得る、という、彼の特徴的な宣教方針の中で展開されているのは興味深い。社会習慣や法制度が全く異なる日本において、アスピルクエタが生前度重なる改訂の労をいとわず、数千という条項に整理していったカトリック倫理神学の規範の一つ一つを、すべて日本語に翻すことは得策ではなく、ヴァリニャーノの言葉でいえば「知らなくてもよいこと」である。したがって、信徒の霊的救済と、キリスト教共同体形成のための道徳的統治、という目的を鑑みたあらたな小冊子を作成し、さらに指導的立場の信徒ないし日本人同宿や修道士が読み聞かせられるよう、「～したる事ありや」「～したりや否や」といった口語体の日本語でもって、あらたにまとめ上げることのほうが、布教に益すると判断されたのではなかろうか。

#### 4. 『さるばとるむんち』の基本書誌

このようにヴァリニャーノの意向を受けて作成された『さるば』が実際どのような形で信徒に渡ったか、第4章・第5章では、U本とC本に絞って詳しくみていく。基本書誌を比較して示すと表1のようである。

表1

	U 本	C 本
刊記	（刊記は無いが、40 丁裏に） 此一くはんせんさくありてより すへりようれすの御ゆるしをも てはんひらく者也	（扉裏） IN COLLEGIO IAPONICO SOCIETATIS IESV. Cum facultate Superiorum ANNO. M. D. XCVIII.
大きさ	中本、19.0x12.8cm	中本、18.3x15.5cm
活字	前期国字	後期国字
丁数	(2)、49、(1)	(2)、30、(1)
構成 （数字は丁数）	遊び紙 1、扉 1、 本文 49（手引き 40、字集 4、用 語集 5）、遊び紙 1	遊び紙 1、扉 1、 本文 30（手引き 25、用語集 2、字集 3）、 遊び紙 1
裏打ち反故	漢字ひらがな（どちりいな）	漢字カタカナ（十戒、サルベレジナ）

本書は表紙の文字より現在、「サルバートルムンヂ」「さるばとるむんち」等称せられる。しかし海老沢編（1978）の解説にあるように、内容からするとC本の表紙裏に印字された「CONFESSIONARIVM」（告白書）がふさわしく、先にあげた史料においても宣教師たちは「confessionario」などと称している。U本の表紙裏は白紙であり「CONFESSIONARIVM」

の文字および刊記は無いものの、表紙の文字「SALVATOR MVNDI」とエンブレムは共通している。なぜこの文字が印刷されたか推測の域を出ないが、救世主像が日本で好まれていたことと関係があるかもしれない。

美術史における救世主像を論じた池上（2022）によれば、一般的な図像は以下のようなものである。

イエス・キリストが正面を向いた上半身像に、左手でオーブを抱え、右手をまっすぐ上にあげた状態で、親指と人差し指、中指をのばし、薬指と小指を曲げて祝福のサインをおくる図像を、一般的に「サルヴァートル・ムンディ（救世主キリスト）」と呼ぶ。オーブ（Orbe）とは世界をあらわす球体で、しばしば上部に十字架を載せた形をとる（これを特にラテン語で *Globus cruciger* と表記する）。

ほぼこれにあたる救世主像が、キリシタン版では『どちりいなきりしたん』（1591年？刊）の口絵、『ドチリナキリシタン』（1592年刊）の表紙、『スピリツアル修行』（1607年刊）の表紙などに印刷されており、日本人に好まれたとみられることから、『さるば』では絵の代りに文字が印刷された可能性がある。

U本・C本の本文テキストの違いは Osterkamp（2023）に詳しく、それによると、約1000の異同のうちほとんどが表記の違いであり、約530がU本でひらがなであったものがC本で漢字に、約160が逆に漢字であったものがひらがなになっている。またU本「たぐゐ」（9裏）・C本「たぐひ」（6裏）のようなかなづかいの違い、U本「さぐつて」（38裏）C本「さぐりて」（24裏）のような音便・非音便の違いもある。「ぜずきりしとの御にうめつ」（33表）の「入滅」という仏教語が「御死去」（21裏）となるような語句の違いはあるが、数は少ない。印刷物としての違い、字集・語彙集の違いは第5章で詳しく論じる。

また、C本、U本にはどちらも、『さるば』とは異なるキリシタン版の反故が用いられている。C本の断簡は、漢字カタカナの表表紙裏面の十戒の一部と裏表紙裏面のサルベレジナへの祈りの一部であり、極初期の国字印刷と目されている。一方、キリシタン版『朗詠雑筆』（1600年刊）（『和漢朗詠集』とも称される）にも漢字カタカナ断簡がみられ、この内容が『さるば』の一部「善作に日を送るべき為に保べき条々」の異植字版であることから、少なくともこの箇所について、異なる版で少なくとも3回（漢字カタカナ断簡・U本・C本）印刷されたことが明らかである。一方、U本の断簡は、前期国字活字を用いた『どちりいなきりしたん』の一部とみられるが、パチカン本とは版が異なる。このことは5.1.にて述べる。

## 5. キリシタン語学の視点からみたユトレヒト本

### 5.1. 活字と印刷

#### 5.1.1. キリシタン版国字本の出版

キリシタン版国字本は、使用活字の違いにより、極初期カタカナ本、前期国字本、後期国字本の三種に分けられる。Osterkamp（2023）が述べたように、本稿で紹介する U 本は使用活字からみて前期国字本の一つであることは明らかで、これまで前後期の間にあった約 5 年間の空白を埋める刊行物として注目すべき文献である（表 2）。

表 2

分類	文献	刊行年代	刊行地（推定含む）
極初期片仮名本	サルベレジィナ他	?	加津佐・天草？
前期国字本	どちりいなきりしたん	1591 ？	加津佐・天草？
	ばうちずもの授けやう	1592 ？	
	さるばとるむんぢ（U 本）	1595 ？	
後期国字本	さるばとるむんぢ（C 本）	1598	長崎？
	落葉集	1598	
	ぎやどべかどる	1599	
	どちりいなきりしたん	1600	長崎
	おらしよの翻訳	1600	
	朗詠雑筆	1600	長崎？
	ひですの経	1611	長崎
	太平記抜書	1611-12 ？	？

刊行年の 1595 年は、Osterkamp（2023）がルイス・フロイスが長崎から 1595 年 10 月 20 日に送った、1594 年 3 月から 1595 年 10 月の年報の記述より推定したものである。これについて使用活字の観点から検証を行うことも必要であろう。例えば後述のように前期国字本では使用活字の入れ替えがあり、その消長の様子からみて『どちりいな』と『ばうちずも』の先後関係も説明できるので、その方法を U 本に応用することが可能である。

これまでに、前期国字本の特徴として以下が指摘されている。

- (1) 活字はヨーロッパ製である。
- (2) 既存活字の合成と切削がある。
- (3) 傾斜活字がある。

(4) 使用活字の入れ替えがある。

(1)は、『日本のカテキズモ』（1586年リスボン刊）の標題紙に前期国字本と同じ活字を用いた印字があることを豊島（2010）が指摘している。(2)は「男」の活字から「田」を切削して「力」の活字を二次的に制作するようなことで、『ばうちずも』の活字影印の全数調査に基づいて山口（1992）が報告しており、(1)との関連から判断すれば、この段階で日本国内での活字鋳造が不可能だった蓋然性が高い。(3)も山口（1992）に説明があるように金属活字制作の方法からみて興味深い特徴で、活字父型が共通しながら何らかの理由によって傾いた活字母型が生じ、それに基づく活字の量産があったことを示している。(4)は前期国字本において使用活字の入れ替えがあったことを、従来から知られる『どちりいな』『ばうちずも』について白井（2005）が検証したものだが、ここに新たにU本が加わることで、改めて使用活字からみた前期国字本全体の関係を明らかにし、刊行年代の先後関係を特定することもできるだろう。

本章では、1595年刊行と推定されたU本の刊行時期について、他二本の後であることを、使用活字と印刷技法の観点から明らかにしたい。

### 5.1.2. 使用活字と印刷技法からみた特徴

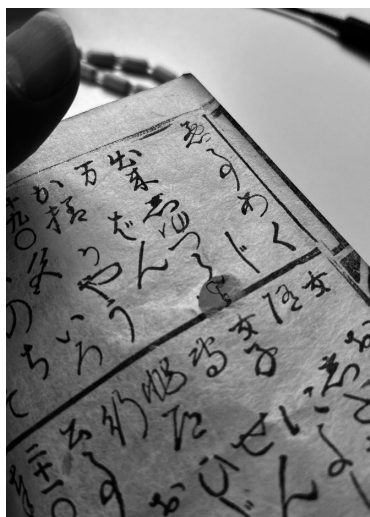
#### (ア) 使用活字の概要

本稿を執筆するにあたり、U本の全活字影印を画像データとして切り出し、従来から構築してあった他二本のデータベースに統合した。全体的傾向として、U本は活字の運用からみて他の前期国字本と同じ特徴を示すが、印字のかすれや活字の摩耗が目立ち、印字の際に用紙と活字が誤って接触することで起こる二重印字<sup>22)</sup>もみられ、用紙にも大きく穴が空いた箇所（図版2）があるなど、印刷の状態は良くない。

---

22) 二重印字は、活字面に対して印刷用紙を配置する際に、印刷用紙が活字面に斜めに接触してインクが転写され、その後、本来の位置で再度印字されることによって起こるもので、注意不足や技術不足を物語る特徴である。





図版2：44丁裏・字集「出来しゆつら」の下に穴が空いている  
(44丁表「ばかり」の「り(里)」字の裏面が見える)

使用活字は次のとおりである。

漢字活字 222種（1字種につき1活字）

他に小型漢字活字 10種

仮名活字 110種（変体仮名を含む）

記号類 6種

計 348種

同じ本文をもつC本は漢字活字360字種を使用し、これは後期国字本の水準としては少ない（『ぎやどぺかどる』は約1,600種）が、U本は更に少なく、後でみるように基本的な漢字に限って使用している。このことは文献の用途として次の5.2.に述べるように、『さるば』は前期後期本ともに携帯性に優れた中本の判型であり、内容も「信仰生活の手引書」「告解の手引書」で信徒が実際に利用するというという基本的性格に合致するものである。

また、仮名活字には濁点付き活字も含まれるが、U本は本文・字集で濁音活字が期待される位置に清音活字を用いることがある。本文1丁の「されハ」「おもはゝ」、2丁の「たゝし」「たゝす」「たゝして」、3丁の「あてかひ」「のかるゝ」「おもはゝ」「からさ」<sup>23)</sup>、「さたまれる」「けかれ」などである。字集では、41丁に「二度ふたたび」「第一たいゝち」、42丁に「条々てうゝゝ」がある。なお、字集43丁以降にこのような例がみられないのは何か理由があつ

23) 4行後に期待される濁音活字を用いた「がらさ」がある。

たかもしれない。逆に清音活字が期待される箇所<sup>24)</sup>に濁音活字を用いた例に、42丁の「同 おなじぐ」がある。

#### (イ) 分かち書き

キリシタン版国字本では分かち書きが行われることがある。文節開始位置を示すための工夫とみられるが、白井(2009)で述べたようにC本に顕著に認められる特徴である。例えば以下は「進退のみ」という誤読の可能性が高く、それを防ぐために分かち書きを行ったとみられる。

あにまも 種々の妄念 言語 進退の みだり なるを (C本3裏7)

同じ箇所について、U本では「しゆゝゝ」「まう念」のように表記は異なるが、明確な分かち書きがみられない。このように、U本で常に意識的な分かち書きが行われたとは言えないが、1行内に配置した活字が少なめで字間が広く開く場合には文節の切れ目を優先している。以下は分かち書きが顕著なU本の字集の序文の例である<sup>24)</sup>。

(うゑ)にも 一二三を つくるなり ひとたび まゑ (に) (41表5)

(かみ)かずと じの うゑの かずを みあはせ たづぬ (る) (41表7)

分かち書きは誤読防止を意図したものと思われるが、仮名表記中心であっても前期国字本『どちりいな』『ばうちずも』や後期国字本『どちりなきりしたん』では明瞭でない。使用活字は前後期で異なるものの、分かち書きは『さるば』に共通した特徴である。

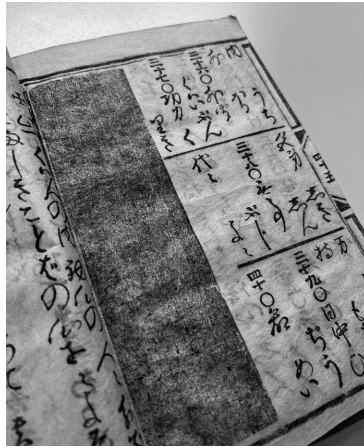
#### (ウ) 標題紙のモノグラムとタイトル活字

U本の標題紙には、C本と共通のモノグラム(書標)が印刷されている。これは富永(1978:200)では10番に相当するもので、原本調査の際にC本の画像と比較したところ、“SALVATOR/MVNDI”のタイトル文字の微細なずれの様子も含めて両者は同一であった。先述のように両本は同じ中本であるため、標題紙は木版または銅版で使い回されたと判断できる。後期国字本で標題紙裏にある“CONFESSIONARIVM”以下の標題と刊記はU本にみられない。

24) この例でも6行目はむしろ活字を詰め込んでおり、一貫性があるわけではない。

## (エ) 末字集・用語集の末尾の処理

U 本巻末の字集・用語集の各末尾には、黒く塗りつぶされた領域が印刷されている（図版 3）。



図版 3：45 丁裏、字集末尾の黒塗り

これは日本の木版印刷において一般的にみられる方法だが、活字本であるキリシタン版では様々な大きさのビニエットが印刷されるのが通例であり、黒塗りの状態は珍しい。例えば U 本の本文末尾の「此一くはんせんさくありてより」以下の日本語允許状の左側には縦長のビニエット（装飾模様）が印刷される。このビニエットは富永（1978:200）では 2 番に分類されるもので、1590 年から 1596 年まで複数のキリシタン版に用いられている。

活字本において、木版を思わせるこのような処理が行われたのは興味深い。活字本においてこうした処理を行うためには、黒塗り印刷する領域にあわせた長方形の部材をはめ込む必要があり、それなら本文で行ったビニエットを配置する手間とさほど変わらないと思われるからである。敢えてそうした処理を行った理由として考えられるのは、本文と字集・用語集では方針が異なり、本文が標準的なキリシタン版の印刷技法を用いたのに対し、字集・用語集には木版刷りの発想<sup>25)</sup>が取り入れられていた、ということである。

## (オ) 表紙裏の補強紙

U 本の表紙と裏表紙には、それぞれ補強紙として『どちりいな』の 68 丁表、41 丁表の印刷済用紙（反故紙）が貼付されている。Osterkamp（2023）が目目するように、裏表紙の補強紙はバチカン本『どちりいな』の本文と全く同一だが、表表紙の補強紙は『どちりいな』

25) 大内田（2008）は、前期国字本の印刷には木版印刷に詳しい複数の日本人が関与したと述べており、何か関連があるかもしれない。

の 68 丁表と本文はほぼ同一ながら、2-4 行目では行頭の文字が異なり、『どちらいな』に比べて U 本補強紙では 1-2 字分が前の行に移動している。ところが 7-8 行目にそうした特徴はないので、U 本補強紙の 1 行あたりの文字数が多いとまでは言えない。

使用活字にも多くの不一致がみられる（表 3、〈 〉内は仮名字母を示す）。

表 3

	U 本補強紙	どちらいな本文
1 行目	へにてんしや 「や」正立活字	へにてんしや 「や」傾斜活字
2 行目	あにま 〈阿尔末〉	あにま 〈安仁末〉
	やま（ひ） 「や」正立活字	やま（ひ） 「や」傾斜活字
2-3 行目	やま（ひ） 〈也満□〉	やまひ 〈也末比〉
3 行目	すひりつある 〈寸比里徒阿累〉	すひりつある 〈春比里徒安累〉
5 行目	「ハ」字形 A	「ハ」字形 B
6 行目	「ハ」字形 B	「ハ」字形 A
7 行目	こうくはい 〈己字久八以〉	こうくはい 〈己字具八以〉
8 行目	ことは	ことば
	ざんげ	さんげ
	三にハ 「三」傾斜活字	三にハ 「三」正立活字
	「ハ」字形 B	「ハ」字形 A


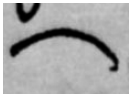

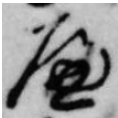
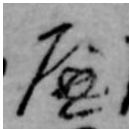
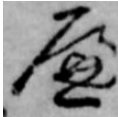







これだけの不一致が生じたのは、U 本の補強紙が『どちらいな』と本文を共有する異植字版であるからに他ならない。前半の改行位置のずれはその結果として説明できる。また、Osterkamp（2023）は「本文は同じ」（The text as such is the same）としているが、実際には 8 行目の『どちらいな』の「さんげ」に対して U 本補強紙は「ざんげ」であって清濁が異なる。僅かな例でありここから結論を出すのは躊躇われるが、『日葡辞書』の“sanguē”が標準形だとすれば、誤植を修正するために再印刷がなされ、それに伴って生じた反故紙が U 本補強紙なのかもしれない。

組版印刷後に解版し、再度組版した際に本文が改訂された例として、『ひですの経』の補強紙の例がある。折井・白井・豊島（2011）の解説に述べたように、『ひですの経』8丁の印刷済用紙を同一書の補強紙として用いた例だが、一丁の冒頭と末尾は一致するものの本文が大きく異なり、大幅な改訂の痕跡を残している。U本の補強紙は、規模は全く異なるものの印刷解版後の再印刷ということでは共通しており、組版を維持したまま部分的に活字を入れ替えるような、印刷時の校正にかかる部分的修正とは異なる本文の改訂が行われた例としてみておきたい。

### 5.1.3. 活字の入れ替わりと印刷の連続性

ここでは前期国字本で最大5種類みられる仮名活字〔へ〕（以下、活字を示す場合は〔 〕に入れて示す）について、三本の使用状況から印刷の連続性と先後関係を探る（表4、空欄はその活字が使われていないことを示す）。

表4

	どちりいな	ばうちずも	U本
〔へa〕	255 	3 	
〔へa〕（傾斜）	2 		
〔へb〕	19 	2 	
〔へb〕（傾斜）		24 	14 
〔へc〕	86 	94 	130 
〔べ〕	277 	126 	175 

5種類の〔へ〕をすべて用いる文献はなく、使用活字の出入りが認められる。使用を止めたり新たに加えたりしたものだが、これだけでは先後関係までは分らない。

〔へc〕は〔べ〕の濁点を除いた部分と形状が似通っており、『どちりいな』では61丁以降にしか現れない（表5）。

表5

	どちりいな											
丁	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66
へa	4	5	5	3	2	1	1				1	1
へb							1					1
へb斜												
へc							4	3	6	5	4	8
	どちりいな						ばうちずも		U本			
丁	67	68	69	70	…	計	計		計			
へa			2			255	3					
へb	2					19	2					
へb斜							24		14			
へc	4	3	6	4		86	94		130			

『どちりいな』では61丁を境に〔へa〕と〔へc〕が入れ替わっている。〔へc〕は『どちりいな』の前半を印刷する段階では存在せず、61丁に至って〔べ〕の濁点の切削により新たに生じた活字と推定される。62丁以降には散発的だが〔へa〕〔へb〕も使用されるので、活字そのものが無くなったわけではないのだろう。『ばうちずも』とU本では最もよく使われる活字であるから、『どちりいな』の印刷段階での変化がこれらの文献に引き継がれた蓋然性が高い。

同様の特徴は仮名「を」「か」にもみられる（表6、表7）。

表6



	どちりいな	ばうちずも	U本
を 	795	4	
を（傾斜） 	316（57丁から）	378	579

表 7

		どちりいな	ばうちずも	U 本
か a		420	180	254
か b		53	4	
か c		133 (61 丁から)	90	118
か d			1	

〔を（傾斜）〕は『どちりいな』では57丁以降にしかみられない。『ばうちずも』とU本の殆どは〔を（傾斜）〕なので、『どちりいな』に続いて印刷されたとみるのが自然である。

〔か c〕も同様に、『どちりいな』では61丁以降にしかみられない<sup>26)</sup>。これも、継続性からみて「へ」「を」と同じように考えてよいだろう（なお、〔か b〕は専ら『どちりいな』にみられ、U本には全く使われない。『どちりいな』では「加様（斯様）」の語を「か様」で組版した3例をみるが、活字デザインの点からみても、〔か b〕は本来、漢字活字だったのかもしれない）。したがって、活字の出入りはあるとして、在庫する活字を意図的に使わないということがなかったのなら、『どちりいな』→『ばうちずも』→U本の順に印刷された蓋然性が高く、1595年刊行であっても不自然ではないと考えられる<sup>27)</sup>。



また、このような順序で印刷されたとすれば、〔を〕〔か b〕は途中で使用されなくなっている。同様の特徴を示す活字に「ハ a」がある（表8）。

26) 〔へ c〕と同じ61丁であり、印刷工程上の何らかの変化があった可能性を考えたいが、本文上は60丁から区切れない内容である。

27) なお、ここで取り上げた印刷途中で新たに現れる3種の活字のうち2種が傾斜活字であることは示唆的である。傾斜活字が他の活字とは異なる時期や環境で制作されたと考えたいが、まだ明らかにできていない。

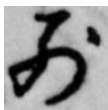
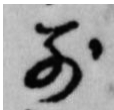
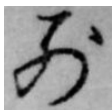
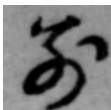


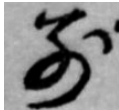



表 8

		どちりいな	ばうちずも	U 本
ハ a		680	204	359
ハ b		243	88	

また、二字間で使用する活字を整理した例に「別」「前」がある（表 9）。

表 9

	どちりいな		ばうちずも		U 本
別	 51	 4	 1	 2	 9
前	 9		 4		 9

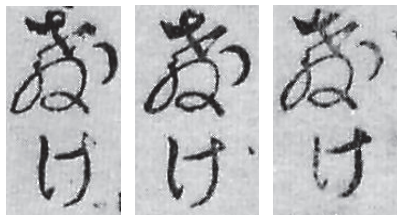
『どちりいな』『ばうちずも』では「別」に対応する活字が「前」と混同していたが U 本では使い分けが徹底している。誤用に気づいて改善したのだろう。また、「化」は U 本で活字を入れ替えている（図版 4）が、『どちりいな』『ばうちずも』の〔化〕は〔他〕の一部を切削した形であり、U 本の印刷にあたって新規に作成した木活字かもしれない。また、この活字が当初よりあったとすれば、『どちりいな』『ばうちずも』では本来使うべき「化」活字の存在を見落として切削したとおぼしき活字の利用を優先したことになるが、その可能性は低い（図版 4）<sup>28)</sup>。

28) 『ばうちずも』の「教化」は、漢字表記「教化」が 9、11、12 丁、交ぜ書き「教け」が 22、24、24 丁、仮名書き「けうけ」が 1、11、21 丁である。同書の傾向として必ずしも漢字表記に拘らないので曖昧な部分もあるが、12 丁を最後として〔他〕を切削した〔化〕を失って仮名でしか組版できなくなったとみるべきだろう。その間、当初から存在する〔化〕を顧みないのは不自然なので、新規に作成したという蓋然性が高い。なお、U 本の原本調査にあたって〔化〕（本文 10 表 8、字集 43 裏 15）を詳細に確認したが、やや小ぶりのデザインに違和感はあるものの、他の活字との顕著な違いは認められなかった。



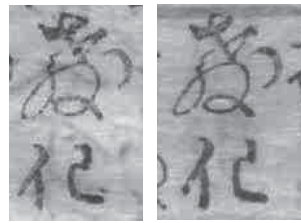
どちらいな・ばうちずも

「他」活字 → 「化」活字として切削



ばうちずも

22 丁以降は仮名活字で組版



U 本 10 表 8・43 裏 15

「化」を新規作成？

図版 4

#### 5.1.4. 新出活字の特徴

U 本には新出の漢字活字が「入刀化只問夫定必念思文書月法火言題食」の 18 種ある。このうち「刀」は「力」の切削とみられる。<sup>29)</sup> 新出の仮名活字は 3 種目の「ず」であり、濁点付きの「ず」を切削したようである（表 10）。

『どちらいな』『ばうちずも』で仮名表記だった語が漢字表記されている。これらは漢字活字を在庫しながら敢えて使わなかった、即ち、本文の読みやすさに配慮して仮名表記を行ったとみるのは不自然でない<sup>30)</sup>。したがって、U 本の印刷にあたって活字を新鋳することはなかっただろう。

先行する二本で仮名表記だった語や漢字が U 本で漢字表記に改められたのは、前期国字本のなかで同書だけが字集を持ち、本文とは別に漢字の読みを示すことができたためである。字集に掲載のないのは「夫」のみで、表中に太字で示した他の漢字はすべて字集に掲載がある（本稿 5.2. も参照）。

また、特に『ばうちずも』では「一さい（一切）」「教け（教化）」「しん実（真実）」「談ぎ

29) U 本でも「刀」と「力」の形状がよく似ているものの巻末の語彙集では明確に区別されることを漆崎（2017）が指摘している。活字は異なるが、U 本の 30 丁裏 2 行目では「合力」を誤って「合刀」とするように見分けにくいのは事実である。

30) 活字の分布からみて、漢字活字在庫が払底したため仮名に逃げたとは考えにくい例が多い。

表 10

	どちりいな	ばうちずも	U 本
入	いる 1		出入（しゅつにう）1・入る（いる）2
刀		かたな 1	刀（かたな）1・刀（誤ちから）1
化	教化 1	教化 3・教け 3・けうけ 2	教化（けうけ）1
只	たゝ 29・たゝいま 4	たゝ 8・たゝいま 3	只今（たゝいま）6・只（たゝ）1
問			問ふ（とふ）1
夫	おつと 1	おつと 1	夫（おつと）7
定	さだむ 25・さだまる 4	さだむ 15	定（さだむ・さだまる）14
必		かならず 1	必（かならず）1
念	ねん 5・あくねん 3・まうねん 1・くはんねん 1・むねん 1	きねん 1・くはんねん 1	まう念（ねん）1・悪念（あくねん）2・念（ねん）2
思	おもふ 40	おもふ 19	思ふ（おもふ）16
書	かきをく 1	かきをく 1・かき付く 1	書く（かく）1・書物（しよもつ）1
月			月日（つきひ）1・年月（ねんげつ）1・月まち（つきまち）1
法	はつと 3・はう 2・はうしき 2・すんはう 1	はつと 1	法（はう）1
火			火（ひ）3
言	きよごん 2・ぜんごん 2・ごんじやう 1・ざんげん 2・げんにび 1	ごんご 1・ゆいごん 1	言語（ごんご）1
題	だいもく 4		題目（だいもく）7
食	しよく 2・しよくじ 1・しよくぜん 1		食物（しよくぶつ）2・食後（しよくご）1・食す（しよくす）4

（談儀）」「道り（道理）」のような交ぜ書きが多くみられるが、それらはU本ではすべて漢字で組版されている。したがって同書の「まう念」のような例は、そもそも「妄」の漢字活字がなかったため、仕方なく仮名で組版したものである。

### 5.1.5. 本節の小括

U本の活字は他の前期国字本と共通しており、活字の運用にも類似した特徴が多い。このことは、前期国字本としての統一性・継承性があることを示している。使用活字の特徴は、他の前期国字本の刊行後にU本が印刷されたことを示唆しており、前期国字本の印刷期間中に、金属活字（新規鑄造による）や木活字を追加した可能性は低い。但し、入れ替えた漢字活字「化」や傾斜活字には疑問が残る。U本で始めて現れる漢字活字は、他二本で仮名表記されていた語を漢字で組版したものだが、その理由は同書が字集を持ち、本文とは別に漢字のよみを示すことができたためである。

### 5.2. 字集・用語集

U本には、後の版であるC本と同じく、原語および漢字語の二種類の語彙集が付されている。以下「用語集」「字集」と略記する。U本は字集・用語集の順であり、本文・字集・用語集は丁が分かれている。C本は用語集・字集の順になっており、26丁表で本文末尾と用語集、27丁裏で用語集と字集が連続している。

字集は丁ごとに分けて漢字語によみを付したもの、用語集はポルトガル語やラテン語から借用したキリシタン用語に語釈を加えたものである。U本の字集・用語集それぞれの冒頭は以下の通りである。

字集（41 裏）

一〇 儀 ん 善作 ぜんさ 理 ことはり

用語集（46 表）

〇さんちいしまちりんだあで 貴き三のへるさうな御一体のどうすの御事也

〇どうすはてれ 第一のへるさうな御事也

字集は、現存するキリシタン版のうち『ぎやどぺかどる』（1599年刊）、『おらしよの翻訳』（1600年刊）にも付されているが、前期活字本ではU本が唯一であり、最も古い字集ということになる。一方用語集は、『さるば』以外には見られない<sup>31)</sup>。したがって二種類とも、本文付属の小規模なものながらキリシタン版の辞書として注目される要素をもつ。ここでは、これらがなぜ『さるば』に付されたのかを、字集・用語集の相違を指摘しつつ考察する。

31) 写本であれば、『スピリツアル修行』の原語語釈集であるいわゆる「吉利支丹用語略解」が知られる。柊（1957）参照。本文出現順であること、難解な語が多いことなど、『さるば』用語集と異なる点が多い。

### 5.2.1. 字集

まず字集について述べる。用語集はU本・C本とほぼ同じであるが、字集は本文の活字・用字が異なるため収載語は必然的に大きく異なり、立項数だけを見てもU本が218、C本が273である。ただし字集冒頭の説明はほぼ同じく、以下の通りである。引用はU本からであり、句読点の代わりに原文に無い空白を加えた。

このきやうのうちにそなはるじのよみこゑをつけあらはすなり これも又やすくたづね  
あたらしめんかためにかみかずの一二三にしたがひ こゝにあつめをくじのうゑにも一  
二三をつくるなり ひとたびまゑにつけたるじをかさねてはつけざるかゆへに かみか  
ずとじのうゑのかずをみあはせ たづぬるじなきにをゐては まゑにありとこゝろへあ  
とをたづぬべし

本文の漢字語の音訓を出現順に、丁数のもとに示し、再出語は立項しないという基本方針はC本でも変更されていない。基本方針は同じであるものの、U本では本文の出現順になっていないことが少なくない。例えば2丁では以下のように、本文の出現順①～⑮に立項されていないことが多い。また③⑩「給」字は、活用語尾は異なるものの訓よみが重複してあげられており、字集のこのあとの箇所にも、「給はゞ たまはゞ」(3丁)、「給ふ たまふ」(9丁)が再掲されている。

本文(2)

①人間の御たゝしてと②定め③給ふによて一切  
人間のぜんあくを御きうめいなされしやう  
ばちの二つをおこなひ給ふ御④位をあたへ給ふ  
なり又御⑤主ぜずきりしとは此位をさせる  
たうてすに⑥下さるゝ也其位と⑦云は人間の  
科をきゝたゝしあきらめられそれ／＼に  
あひあたる科をくりをさづけられよとの  
儀也⑧或時御でしたちに此御ゆるしの⑨力を  
あたへ⑩給ひて⑪宣はく⑫汝等すひりつさんとを  
うけよ又人間の科をきゝそれをたゝす  
べし⑬然らば汝等⑭世界にをひてさだめたらん  
事をは我も⑮天にをひてよしとすべしと  
此御ことばを以てこんひさんのみちを定め

給ひこんへそるには又た、してのやくと  
 して科をゆるさるゝいりきをあたへ給ふなり  
 されば此儀を定め給ふを以て⑩我等にことに  
 すくれたる四の⑪御恩を下さるゝ者也○一つには  
 我等か科のたゝしてとならるゝこんへそるは  
 我等⑫同生の人間なれば科をあらはす事  
 もやすかるべしもし此やくをあんじよに

字集（41 裏）

- ⑦云 いふ
- ②定 さだめ
- ①人間 にんげん
- ③給ふ たまふ
- ④位 くらひ
- ⑤主 あるじ
- ⑥下さるゝ くださるゝ
- ⑧或時 あるとき
- ⑨力 ちから
- ⑩給 たまひ
- ⑪宣はく のたまはく
- ⑬然 しからば
- ⑫汝等 なんだち
- ⑭世界 せかい
- ⑮天 てん
- ⑯我等 われら
- ⑰同生 どうしやう
- ⑱御恩 ごおん

U 本には上述のような本文とのずれ、不備とみえる箇所が少なくない。このほか、10 丁裏の「七日」が字集の 11 丁に含まれるなど、本文と字集の丁数が異なっている例が複数ある。C 本の方は、豊島（1984）が指摘している本文のよみとのずれや、活用語尾が異なる同語の再掲は見られるものの、U 本よりも整備されている。

U 本の字集に注目される語として「伴天連」がある。U 本の原語はひらがな表記されてい

るが、「伴天連」は例外として本文に2例あるうえ字集にも立項され、「はてれ」のよみが付されている。

本文 (11 裏)

あるたるの前にひざまづき伴天連ゑうかりすちやをさづけ給はん時は口をひらき

字集 (43 裏)

伴天連 はてれ

「伴天連」のほか同じ神父の意味で「は（あ）てれ」も使われており（34 丁裏、用語集の 46 丁裏、47 丁表）、「伴天連」と「は（あ）てれ」とを使い分けている様子はない。のちの C 本の同じ箇所では「ばあてれ」（6 丁裏、7 丁裏）と、すべてひらがなに統一されている。

「伴天連」は、キリシタン版において原語が漢字表記された数少ない例である。しかし岸本（2023）にて指摘したように、写本では「貴理師端往来」（1568 年頃）、「伴天連追放令」（1587）など、比較的早くから用例がみられる。U 本の本文および字集に「伴天連」表記が採用され、しかも、「は（あ）てれ」と併用したのは、キリシタン版において原語にかな活字が用いられるようになってからも、それ以前の漢字表記が通用していたことを示していると思われる<sup>32)</sup>。『さるば』字集に「伴天連」が立項されたのは、その目的を考えると、漢字表記がある程度普及していたこの語を、他の漢字語と同様よみ・書きを学ばせようとしたものだろう。

ここで、『さるば』本文全体の漢字使用を考えたい。『さるば』以前の『どちりいな』『ばうちずも』の本文は、かなが多く漢字は少ないが、『さるば』では漢字活字が種類も分量も大幅に増える。前期活字の時期あらたな鑄造は行われなかったようなので、『どちりいな』『ばうちずも』では、すでに手元にはある漢字活字は使わずあえて、かな活字を多く用いたことになる。『どちりいな』『ばうちずも』と U 本『さるば』とで表記方針が異なるのは、以下のように考えられよう。『どちりいな』『ばうちずも』は、漢字を知らない読者にも読めるかな主体の本文とし、その代わり、字集は付さなかった。一方『さるば』は、日本語としてより一般的な表記である漢字かな交じり文とし、漢字に不案内な読者のために字集を補ったのであろう。

### 5.2.2. 用語集

字集が、必ずしも読者がキリシタンに特化されない、漢字のよみ書きを目的としたものであるのに対し、用語集はキリシタンを対象に教義上の用語を説明したものである。冒頭に、

32) このような原語表記の不統一には、『ひですの経』の「安如」（7 例、「あんじよ」が 19 例）、「恵実土」（1 例、「ゑじつと」が 1 例）の例もある。白井（2014:477）参照。



この用語集の目的と内容が示されている。

此一くはんの内初心の人々分別致すまじきことばの心を、よそ<sup>33)</sup>にあらはす者也

「分別致すまじき」は、C本では「分別しがたかるべき」と表現がやわらげられている。用語集中の異同は少なく、立項された35語とその順序は同じであって、U本の内容がC本にはほぼ踏襲されている。

原語の表記には若干異同があるが、U本内、C本内で見ても以下の通りゆれがある。またキリシタン版全体で見ても厳密に表記が統一されたことはないから、『さるば』が特にゆれが大きいというわけではない。

U本本文（11表）

其日ゑうかりすちあをうけ奉る事叶ず

U本本文（11裏）

ゑうかりすちやをさづけ給はん時は

U本用語集（46裏）

ゑうかりすちや

C本本文（11裏）

せすたさばどくはれいずま其外ゑけれじやよりいましめ給ふ日にくじきたるや

C本用語集（27表）

くはれずま

続いて、用語集の立項、語釈、配列を考える。『さるば』の対象者は告解を準備する日本人信徒であり、すでに入門書『どちらいな』を学んだことが想定されていたはずである。『どちらいな』には原語が160語以上（固有名詞を含む。単数形・複数形を区別するかなど、数え方によって異なる）用いられている。用語集の立項語はほぼすべて『どちらいな』に使用されており<sup>34)</sup>、『どちらいな』で学んだ知識を補強する役割が想定されていたと思われる。「初

33) 『さるば』ではC本でも、しばしば自立語の語頭に「ゝ」が用いられている。豊島（2001:379-380）参照。

34) 例外的に『どちらいな』に用例がないのは、「ゑすきりつうら」「せくんだ」「てるしや」「くはるた」「きんた」の5語である。「せくんだ」以下の4語は後述する。「さんちいしまちりんだあで」も、この連続の用例は『どちらいな』にないが、「さんちいしも」および「ちりんだあで」の用例があるので除いた。

心の人々」が対象と言いながら、教義に関する知識がゼロの初心者を対象としていないことは、語釈中、用語集に立項されない原語が用いられていることからもうかがわれる。以下の「ぺるさうな」「みいさ」は、用語集にない語である。「みいさ」の方は、和語・漢語に付く「御」が前接しており、日本語として定着しつつあったことがわかる（ちなみに、現代カトリック教会でも「ごミサ」又は「おミサ」の語が使われることがある）。

(46 表)

どうすはてれ 第一のへるさうなの御事也

(49 表)

かりす 御みいさの御をこなひにつかひ給ふ貴きしろかねのうつはもの也

また、『さるば』本文に使用されているが用語集にない語は、以下の通り実に 30 語近くあり、立項の基準は明確ではない。「どうすばあてれ」の「どうす」のように、一部がほぼ同じ意味で立項されているものは省略し、五十音順に並べた（濁点半濁点が原文にない場合は補った）。

あべまりや あめん あるたる おらしよ きりしたん ぐらうりや くるす こんしゑんしや こんたす こんちりさん さきりれじよ さんた さんたまりや さんと さんとす さんばうろ ぜじゆん ぜずきりしと ぜずす ぜんちよ ちしぴりな ばあてる なうすてる ぱしよん びるぜん ぺるさうな べんさん ぼろしも みいさ

立項されていない語は「きりしたん」など『どちりいな』に説明されている語が多いようであるが、立項語の中にも「はらいそ」「いんへるの」のように『どちりいな』に詳しい説明がある語が少なくない。

立項の基準という点でいえば、用語集には『さるば』本文に用例のない語もある。末尾に列挙される曜日を表す語のうち、「せくんだ」「てるしや」「くはるた」「きんた」である。本文にある「どみんご」「せすた」「さばど」と合わせて七曜日を覚えるため加えられたと解される。

次に、配列を見ると、本文の出現順ではなく、いろは順、原語のアルファベット順でもない。ゆるやかな意義分類体といえるものであり、先にあげた曜日や、「さんちいしまちりんだあで どうすばあてれ どうすひりよ どうすすぴりつさんと」（三位一体の関連語）のような語がある程度まとめである。したがって、本文を読みながら参照するより、この用語集だけで読むほうがむしろ適した辞書となっている。

### 5.2.3. 本節の小括

以上のように、字集と用語集は、目的・本文との関わりの程度が異なるけれども、読者が必要に応じて利用できる点が共通している。入門書『どちりいな』において、漢字語はかなでひらき、原語は本文内に説明を加えることでほぼ理解できるようにされていたのに対し、『さるば』では本文外の付録にまとめ、各自が適宜利用できる形式にしたのである。

もう一点、U本・C本で変わらなかったことに、本の大きさがある。『さるば』は現存キリシタン版の中で唯一の中本であり、美濃本である『どちりいな』等他のキリシタン版国字本の半分である。この本が携帯しやすい大きさにされたことと、字集・用語集を備えていることは、他書が参照できなかったり指導者が不在だったりする環境でも使いやすいという点で通底する。U本の発見により、『さるば』が前期版の段階ですでに、漢字・用語も学ぶことができる信仰生活のコンパクトな手引として作成されていたことが明らかになった。

## 6. まとめ：研究の今後の見通し

U本は、キリシタン版刊行以前から日本語による告解手引きのテキストが存在し、使用されていたという記録を裏付ける存在である。本稿の第3章で試みられた、告解史の中での位置づけは、今後、ヨーロッパだけでなく日本以外の宣教地で作成された手引きも視野に入れて検討され得るだろう。たとえば、中村（2000）は、プチジャン版『とがのぞき規則』『胡無知理佐无之略』において、中国で刊行された天主教書も参照されたとみられることを指摘している。その一つ『滌罪正規』はジュリオ・アレーニ（漢名、艾儒略 1582-1649）の著作であり、浅見（2022）の解題によれば初版は1627年のようである。したがって本書が『さるば』作成のさい直接参照されたことはないと思われるが、宣教地の言語で作成された告解手引きの一つとして『さるば』との比較が可能な点で注目される。他地域では、平田（2007）の研究があるメキシコ・ナワトル語による複数の手引書、Županov（2012）が分析した、1580年にタミル語で出版された手引きも、『さるば』とほぼ同時期の成立ながら内容上の相違が大きく、比較対象として興味深い。

キリシタン版の一つとしてみると、U本は現存数の少ない前期国字本の3点目として加えられるだけでなく、後期版C本とほぼ同じテキストを有することから、前期版と後期版との連続性を明確に示す存在である。前期国字本『どちりいなきりしたん』（1591？年刊）と後期国字本『どちりなきりしたん』（1600年刊）のように同一書名でテキストも活字もあらためる例だけでなく、テキストや体裁はほぼ継承しつつ活字の種類や表記方法は変えるという例が加わり、新たな視点が提供されたのである。テキストが、ヨーロッパ・カトリック思想を基に日本の習俗に合わせどのように作成されたかという点とともに、どのような形で継承・改変されていったか、他資料と比較しつつさらに検討することが今後の課題であろう。

## 参考文献

- 浅見雅一 (2022) 『キリシタン時代の良心問題：インド・日本・中国の「倫理」の足跡』 慶應義塾大学出版会
- 池上英洋 (2022) 「〈サルヴァートル・ムンディ〉とレオナルド・ダ・ヴィンチ (1)：図像の源泉、クリスティーズ版 (クック版) の来歴と帰属について」 『東京造形大学研究報』 23, pp. 15-41
- 漆崎正人 (2017) 「翻刻 キリシタン版『さるばとる・むんち』」 『藤女子大学国文学雑誌』 97, pp. 35-52
- 海老澤有道 (1943) 『切支丹典籍叢考』 拓文堂
- 海老澤有道 (1952) 「田村氏旧蔵キリシタン教書写本：ろざりよ十五のくわんねん并に十の御おきての事」 『基督教史学』 2, pp. 102-114
- 海老澤有道編 (1978) 『南欧所在吉利支丹版集録』 雄松堂書店
- 大内田貞郎 (2008) 「「きりしたん版」に「古活字版」のルーツを探る」 張秀民ほか 『活字印刷の文化史 きりしたん版・古活字版から新常用漢字表まで』 勉誠出版, pp. 19-68
- 大島一利 (2009) 「キリシタン時代の宣教師報告における悔悛」 『神学研究』 56, pp. 91-104
- 踊共二 (2011) 「宗派化論：ヨーロッパ近世史のキーコンセプト」 『武蔵大学人文学会雑誌』 42 (3, 4), pp. 221-270
- 尾原悟 (1983) 「キリシタン版について：イエズス会日本年報を中心に (一)」 『上智史学』 28, pp. 50-71
- 尾原悟編 (2005) 『きりしたんのおらしょ』 教文館
- 尾原悟編 (2006) 『きりしたんの殉教と潜伏』 教文館
- 折井善果・白井純・豊島正之 (2011) 『ひですの経』 八木書店
- 川村信三 (2011) 『戦国宗教社会＝思想史：キリシタン事例からの考察』 知泉書館
- 岸本恵実 (2023) 「信徒国字文書のキリシタン用語：「ばすとる」(羊飼い) を起点として」 『近世日本のキリシタンと異文化交流』 勉誠出版, pp. 32-54
- 岸本恵実・白井純編 (2022) 『キリシタン語学入門』 八木書店
- 高祖敏明 (2012) 『本邦キリシタン布教関係資料プティジャン版集成解説』 雄松堂書店
- 五野井隆史 (2012) 『キリシタンの文化』 吉川弘文館
- 五野井隆史 (2017) 『キリシタン信仰史の研究』 吉川弘文館
- コリヤード著、大塚光信校注 (1986) 『懺悔録』 岩波文庫
- コリヤード原著、大塚光信著 (1985) 『コリヤードさんげろく私注』 臨川書店
- 白井純 (2005) 「キリシタン版前期国字版本の平仮名活字について」 石塚晴通教授退職記念会編 『日本学・敦煌学・漢文訓読の新展開』 汲古書院, pp. 848-836
- 白井純 (2009) 「キリシタン版の仮名文字遣」 『訓点語と訓点資料』 122, pp. 146-131
- 白井純 (2014) 「キリシタン文献の「傍流」：国字本『ひですの経』からみた『妙貞問答』」 末木文美士編 『妙貞問答を読む：ハビアン の 仏教批判』 法蔵館, pp. 475-485

- 高瀬弘一郎（2017）『キリシタン時代のコレジオ』八木書店
- デンツィンガー・H 著、浜寛五郎訳（1974）『カトリック教会文書資料集：信経および信仰と道德に関する定義集』エンデルレ書店
- 土井忠生（1982）『吉利支丹論攷』三省堂
- 富永牧太（1978）『キリシタン版文字攷』富永牧太先生論文集刊行会
- 豊島正之（2010）「前期キリシタン版の漢字活字に就て」『国語と国文学』87-3、pp. 45-60
- 豊島正之（2013）「日本の印刷史から見たキリシタン版の特徴」豊島正之編『キリシタンと出版』八木書店、pp. 89-155
- 豊島正之（2021）「解説」尾原悟『ぎやどべかどる』教文館
- ドリュモア・ジャン著、佐野泰雄ほか訳（2004）『罪と恐れ：西洋における罪責意識の歴史、十三世紀から十八世紀』新評論
- 中村博武（2000）『宣教と受容：明治期キリスト教の基礎的研究』思文閣
- 西村真次（1937）『日本文化史点描』東京堂
- 東馬場郁夫（2018）『きりしたん受容史：教えと信仰と実践の諸相』教文館
- 日埜博司編著（2016）『コリヤード懺悔録：キリシタン時代日本人信徒の肉声』八木書店
- 終源一（1957）「スピリツアル修行と吉利支丹用語略解 附、「奉教人の死」の素材補説」『国語国文』26-3、pp. 179-189
- 平田和重（2007）「先住民の精神的制服：告解の手引書にみる植民地社会の教会と布教」『朝倉世界地理講座 14 ラテンアメリカ』朝倉書店、pp. 178-189
- プロスペリ・アドリアーノ著、大西克典訳（2017）『トレント公会議：その歴史への手引き』知泉書館
- 松岡洸司（1973）「慶長三年耶蘇会板 サルバトル・ムンズの本文と索引」『上智大学国文学論集』6、pp. 140-200
- 宮川創（2022）「ユトレヒト大学のデジタル・アーカイブにおける新発見キリシタン版の画像公開：附・発見者のスエン・オースタカンブ教授へのインタビュー」『人文情報学月報第 128 号前編』（<https://www.dhii.jp/DHM/dhm128-1>）
- ロベス・ガイ著、井手勝美訳（1983）『キリシタン時代の典礼』キリシタン文化研究会
- 山口忠男（1992）「初期キリシタン版の国字大字本について：「ばうちずもの授けやう」の印刷面を中心として」『ビブリア』98、pp.16-25
- Arcuri, Andrea (2018) El control de las conciencias: el sacramento de la confesión y los manuales de confesores y penitentes. *Chronica Nova*. 44. 179-213.
- González-Bolado, Jaime (2023) "Two Unpublished Letters on the Jesuit Mission Press in Late Sixteenth-Century Japan". *East Asian Publishing and Society*. Volume 13: Issue 1, 37-46.

- González Polvillo, Antonio (2010) *Análisis y repertorio de los tratados manuales para la confesión en el mundo hispánico : (ss. XV-XVIII)*. Huelva: Universidad de Huelva.
- Lea, Henry Charles (1896) *A History of Auricular Confession and Indulgences in the Latin Church*. Philadelphia Lea Brothers and Co.
- Morgado García, Arturo (1997) Pecado y confesión en la España Moderna. Los Manuales de Confesores. *Trocadero. Revista del Departamento de Historia Moderna, Contemporánea, De América y del Arte I* (8-9), 119-48.
- Orii, Yoshimi (2024) Pietro Alagona's *Compendium Manualis Navarri* Published by the Jesuit Mission Press in Early Modern Japan. Bragagnolo, Manuela (ed). *The Production of Knowledge of Normativity in the Age of the Printing Press: Martín de Azpilcueta's Manual de Confesores from a Global Perspective*. Brill (forthcoming).
- Osterkamp, Sven (2022) "A hitherto unknown Jesuit confessionary in Japanese language and script (c. 1595)". Utrecht University Library, Special Collections.  
<https://www.uu.nl/en/utrecht-university-library-special-collections/collections/early-printed-books/theological-works/a-hitherto-unknown-jesuit-confessionary-in-japanese-language-and-script-c-1595>
- Osterkamp, Sven (2024) A hitherto unknown Jesuit confessionary in Japanese language and script (c. 1595) kept at Utrecht University Library (forthcoming).
- Satow, Ernest Mason (1888) *The Jesuit Mission Press in Japan, 1591-1610*. Privately printed.
- Valignano, Alessandro and Álvarez-Taladriz José Luis. (1998) *Apología de la Compañía de Jesús de Japón y China : (1598)*. Osaka: editor not indentified.
- Županov, I. G. (2012) "I Am a Great Sinner": Jesuit Missionary Dialogues in Southern India (Sixteenth Century). *Journal of the Economic and Social History of the Orient*, 55(2-3), 415-446.

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、貴重なご助言をくださった Sven Osterkamp 氏 (Ruhr-Universität Bochum) と、調査および画像掲載を許可して下さったユトレヒト大学図書館の方々に感謝申し上げます。

この論文は、科学研究費補助金 22H00698, 23K00096, 23K00547, 23K00552 の成果の一部です。

Discovery of a New Copy of *Salvator Mundi* in the Utrecht University Library:  
A Study from the Perspectives of Intellectual History and Missionary Linguistics

Emi KISHIMOTO Jun SHIRAI Yoshimi ORII

In 2022, a previously undiscovered copy of *Salvator Mundi*, a Jesuit mission press publication in Japan, was found in the Utrecht University Library. Until this discovery, the sole known copy resided in the Biblioteca Casanatense, printed in 1598. This paper highlights three key findings derived from the analysis of this newly discovered copy:

1. The Japanese texts in both copies exhibit remarkable similarity, suggesting independent creation in Japan while drawing inspiration from extensively produced European confession guides.
2. While the Casanatense copy employed newly created types in Japan, the Utrecht copy preserves early types predating 1598. However, it incorporates several Chinese character types not encountered in two early printed works around 1591 and 1592.
3. Both copies are compact volumes (*Chūhon*), featuring Chinese character dictionaries and glossaries of Christian terms at the end. This inclusion facilitates readers' self-study of Chinese characters and Christian terminology.